



# 研究者生活をふりかえって（岩崎信彦教授 退職記念号）

岩崎, 信彦

---

**(Citation)**

社会学雑誌, 24:1-8

**(Issue Date)**

2007-03-31

**(Resource Type)**

departmental bulletin paper

**(Version)**

Version of Record

**(JaLCD0I)**

<https://doi.org/10.24546/81011063>

**(URL)**

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011063>



# 研究者生活をふりかえって

岩崎信彦

## 一 研究者生活のスタート

私の研究者生活はのっけから「大学紛争」に迎えられた。東京大学医学部における一九六八年一月の登録医制度反対の無期限ストに始まる「大学紛争」は、京都大学に一九六九年一月に「学生部封鎖」という形で飛び火してきた。私は、一九六八年二月に修士論文を書き終え、文学研究科博士課程一回生に在籍しており、全学の大学院生協議会の事務局長の役についていた。否応無く「紛争」に巻き込まれていったのである。

修士論文で、マルクスの「資本制に先行する諸形態」と大塚久雄の「共同体の基礎理論」を比較しアジア的、古典古代的、ゲルマン的の三つの共同体類型を歴史的に考察したが、それを精練して活字にすることはできなかった。

マルクス派として研究者生活を始めていた私は田中清助氏から大きな影響を受けていた。氏は、ドイツ語におけるゲゼルシャフトリヒ（*gesellschaftlich*）とゾチアール（*sozial*）、ロシア語におけるオプシチェストベンヌイとソツィアールヌイの違いに注目しながら、マルクスにおける固有にゾチアールな領域を「マルクス主義社会学」として開拓しようとしていた。ゲゼルシャフトリヒな社会関係は、人間の主観から自立した生産関係に規定された、全体社会的（*societal*）な骨格構造、すなわちマルクスの「土台—上部構造」と言われるものであり、ゾチアールなものにはそれに規定されながらそれを形成、変容させる社会的（*social*）過程を意味している。そのあたりのことを自分なりに整理してまとめたのが「マルクスにおけるゲゼルシャフトとゲマシンシャフト序説」（七二年）であった。

一九七二年に高野山大学に職を得て、大学教員としての生活をスタートした。「紛争」の疲れを癒やしてくれる良い環境であった。理論だけでなく現実分析もしなければと思う余裕が出てきて、地元の和歌山県有田市のみかん農村

調査を始めた。一九六〇年の農業基本法以降、高度経済成長下の都市労働者に果物、酪乳を大量安価に供給するために「選択的拡大」が叫ばれ、みかんは水田を転作してまで作られるようになっていた。当然のように六〇年代の終盤から過剰生産となり、産地はその対応に迫られていた。私が調査に入ったのはそんな時期であった。各農家の聞き取りを行い、経営規模別に類型化しながら、共同灌水施設や共同選果への経営対応の違いを明らかにし、今後の経営展開の課題を考察した。「みかん危機」のもとでの村落生活の変化と主体的再編成（七八年）がその研究成果である。

## 二 地域と労働の調査研究

また、都市も膨張による問題を抱えた時期であり、京都自治問題研究所のチームの一員として宇治市調査に入った。そこで町内会・自治会の創意的な活動に触れることができた。新しく開発された住宅地域には市水道が敷設されていない。市は折からの財政難であった。各戸は井戸を掘って対処していたが不便であったので、これから転入してくる人から資金を徴収して市水道の支管を敷設しようということになり、井戸掘り費用より安上りの資金を徴収し敷設を実現したのである。また、六地藏、木幡という古い地域では、隣接の京都市域に高層の公的住宅団地が建設されるとあって、伝統ある二つの町内会が力を合わせて抗議、交渉しようということになり、子ども神輿を作ってお祭りを一緒に行ない、町内会の合併にこぎつけたということであった。日本の住民自治の原点を見る思いであった。

七九年に立命館大学に転勤した。所属した産業社会学部には専門分野の近い多くの研究者がおられた。寢屋川市職労の要請を受けた遠藤晃氏をリーダーとする寢屋川調査にまず参加した。高度経済成長時代に一気に人口増大した、大阪都市圏のインナーリングにある衛星都市がどのように都市問題をかかえていったか、これからのような対策をとればよいかを探る調査であった（大都市周辺地域における地域生活と住民組織）八〇、八一年。その後も萱島地区の木賃住宅密集街のまちなりのなりたちの調査を続けた。「木賃住宅の町に住みあう人々の生活史」（八九年）がその成果である。

また、深井純一氏に誘われて高原野菜生産が拡大している長野県川上村に出かけた。ここでは入会林野が私的に耕地として蚕食され始めており、入会林野の歴史と現状の考察を行なった。後日談になるが、報告書をまとめた八三年

から十余年立ったころ、川上村役場から電話があり「入会地の問題がたいへんになってきた。ついでには先生の報告書をコピーして勉強会に使って良いか」ということであつた。もちろんいいですよ、と答えた。阪神大震災が起きた直後でもあり、私は川上村を再訪することができなかつたが、入会地はどうなっているのか気にはなっている。

さらに、辻勝次氏らを中心とするトヨタ調査チームの一員として、トヨタの地域戦略と地域状況、改善提案活動やかんばん (just in time) 方式のもとでの労働者の労働生活の分析にたずさわつた。もちろん、企業は調査に協力はしてくれないので、社宅や団地に従業員を訪ね、職場の様子を細かに聞いていつた。地方出身者が多いためか、おとなしく、真面目な人が多く、高密度労働と交替勤務であるせいか、余り血の気がなく、慢性的に疲れているのではないかと思つた。そこでのエピソードであるが、労働者は「改善提案をすれば千円もらえる。しばらくしてあの提案は少し問題があるのでやめた方が良いと提案すればまた千円もらえる。たばこ錢稼ぎにはなるね。人を減らす提案をすれば評価がいいんだけどね（それはできない……）」と言つていた。経営側と労働者のしるぎを削る状況の一端を知ることができた。職場の異なる労働者のインタビュー結果を分析しながら職場での労働状況をバーチャルに構成したのが「自動車産業労働者における労働生活と疎外」(八四年)である。

### 三 ジンメルとマルクスの理論研究へ

八三年に当神戸大学に転勤してきた。理論社会学講座に着任したこともあつて、これまでの地域研究を集約しながら『町内会の研究』(八九年)など、ジンメルの『貨幣の哲学』の研究を始め、マルクス理論の「乗り越え」にも取り組んだ。私はかねてより生産関係に基づく「土台—上部構造」というゲゼルの論理をそのまま前提にしてゾチアー的な「過程」論をさまざまに膨らませてマルクス主義の社会学はできないと感じていた。木に竹を接ぐようなものだからである。それゆえ、『資本論』という生産関係の原理論を読みほぐし、社会過程論へつなげてゆく道を探ってきた。

そのなかで私にとって一番大きなことは、価値形態の第五形態(貨幣Ⅱ商品a、商品b、商品c、…)を発見し、貨幣が商品でなく象徴でよいことを確定したことである(『貨幣と価値—ジンメルとマルクス』八八年)。マルクスは、

あらゆる商品は貨幣と交換されるという第四形態(商品a、商品b、商品c、…貨幣)までしか言っておらず、貨幣は実質的な商品(金)であるという論理で終わっている。しかし、貨幣はあらゆるものと交換できるという貨幣の「万能性」を表現する第五形態が必要であり、しかもその貨幣は商品ではなく象徴(「社会的形態価値」)でよいことを、マルクス自身の価値形態論の論理を使って解明したのである。キーコンセプトである貨幣が経済的実在にとどまらず社会的表象でもあるということは、マルクスの資本論を読み替えていくことができる要石になるはずである。

ジンメルの『貨幣の哲学』は、貨幣を人類の歴史的事象と心の相互作用のメカニズムから解き明かし、「距離」「代償と価値」「絶対的手段」「自己目的」「象徴」「世俗の神」などの魅力的なコンセプトによって貨幣の本質的な姿を浮き彫りにしている。マルクスが人間の営みを商品や貨幣という「物象」において語っていくのに対して、ジンメルは貨幣という「物象」を「心的相互作用」においてとらえていくという、相互に逆のベクトルを持っており、双方を読むことによって貨幣という不思議な現象が良く見えてきたのである。「墮落する世俗の神」「貨幣」(○一年)はこれらをのちに簡潔にまとめたものである。

そのほか、「価値」は労働だけが生むのではない(搾取されるのは労働だけではない)。原料、土地、大気・水、技術(不変資本と言われている物)も価値を生むということである。そうすれば、剰余価値率≡利潤率となり、商品交換における第一巻の「等価交換」と第三巻の「費用価格+平均利潤率」(不等価交換)のずれの問題も消滅する。そして、公害、資源収奪という生態系問題、技術の歪曲の問題も資本論としてとらえられてくる。また、マルクスの「平均利潤率の傾向的低落」によって資本主義は行き詰まりを迎えるという立論が成り立たなくなる(「新しい資本論のために」一九四年)。

また、トヨタの労働者がカイゼン(改善提案活動)に取り組む姿に触れたが、それにかかわって現代の労働者の状況をマルクスのみると次のようになるだろう。

資本は当初、労働過程を形式的にしか包摂できず、実質は労働者に委ねていた。これがかつてのイギリスの *them-us model* (俺たち(ブルーカラー)ーやつら(ホワイトカラー))である。労働者は労働現場を支配しており、組合も強かった。しかし、技術の進展、生産の社会化によって資本による生産過程の「実質的な包摂」が進み、労働者は個々の労働者としてではなく、企画、管理、技術も含めた「全体労働者」(マルクス)として存在している。資本

の機能としての生産＝労働過程であり、「全体労働者」（生産労働システム）が剰余価値を生む、ということになる。そして、賃金は、資本機能への貢献に対する報酬分配として現れるようになる。すなわち、賃金労働者は、そもそも生産手段がないので労働は売れない（農民、自営業者は生産物の形で売れる）。いわば「未労働」を労働力商品として売らざるを得ない。ここに、基本的な搾取と意思決定からの疎隔がある（基本的搾取）。次に、「全体労働者」に組み込まれた労働者は、賃金分配において多様な方法（年功序列、成果主義、経営心理学など）が適用され、格差的分配が行なわれる（分配的搾取）。また、資本機能を「自主的」に遂行しながら、賃金労働者として長時間濃密労働に従事する。矛盾する二側面を「統一」する手法の結晶がトヨタ式カイゼンであったが、そこに人間としての内的葛藤が生じる（人格的搾取）。そして、「全体労働者」の取替え可能な部品の労働には、派遣労働、請負労働、パートタイマーをあてる。それ以外の3K労働には外国人労働者をあて、失業者、ホームレスも増えていく。ここにアンダークラスが形成される（社会排除的搾取）。このように、「階級」矛盾は資本機能を担う労働者の人格のなかへ内攻し、見えるのはアンダークラスだけになっていっている。

#### 四 阪神・淡路大震災の調査研究へ

マルクスの「乗り越え」の研究はいよいよ第二ステージに差しかかろうとしていたまさにその時、一九九五年一月一七日、兵庫県南部地震が発生した。教室の学生の安否確認や年度末の試験措置を済ませて、三月に多くの院生とともに灘区の全避難所調査を行った。どのような「臨時社会」が形成されているか、どんな問題を抱えているかを分析したのである（避難所運営のしくみと問題点）九五年）。

その頃、兵庫県や神戸市は住民が離散している激甚被災地域に対して市街地再開発や区画整理事業の都市計画の網をかぶせようとしていた。まず、院生と一緒に地元の六甲道北部の区画整理事業予定地域に入った。数名の住民が集まる「考える会」に参加した。そのなかで、四散している住民をどのように集めることができるかの議論になり、我々は「神戸市に物申す会」というのを町内ごとに開いてはどうかと提案した。それが一度二度と開かれるうちに住民が集まり名簿ができていった。院生諸君は各町内の会に分担して参加し、住民と市担当者のやり取りを書きとめ、ま

とめて冊子にして配布した。こうして六甲道北部の復興協議会が結成される端緒が開かれたのである。

また、NHKのドキュメントで長田区の鷹取東が放映され、家族を亡くしながらも助けあっている姿に感動した私は電車やバスを乗り継いで訪ねた。それから六年後の二〇〇一年二月、神戸市で最初の事業完了となったが、私はその間、「復興まちづくり協議会」とともに活動した。市と住民の対立、住民同士の対立はほんとうに厳しいものであった。その原因は、一つは、土地区画整理事業という法定事業が災害復興を目的に作られたものではないので多くの軋轢を生じたこと、二つは、神戸市がその履歴から「都市経営主義」であり住民は「統治対象」であったので、住民を反発させあるいは意気阻喪させたこと、三つは、仕組みとしてコンサルタント、弁護士、研究者といった人からなる第三者機関が作られず軋轢をいよいよ激化させたこと、である。この経験をまとめたものが「復興まち壊し土地区画整理事業は今回で終わりに」（一九九年）である。

私は、神戸大学のさまざまな専門の研究者が復興支援と調査に入っていることを知り、神戸大学震災研究会の結成を呼びかけ、四月に会が立ち上がった。そして、九五年一月の神戸大学震災研究会編『阪神大震災研究1 大震災一〇〇日の軌跡』を皮切りに、九七年二月に『阪神大震災研究2 苦闘の被災生活』、九七年五月に『阪神大震災研究3 神戸の復興を求めて』、九九年一二月に『阪神大震災研究4 大震災五年の歳月』、二〇〇二年一月に『阪神大震災研究5 大震災を語り継ぐ』が七年間にわたって刊行された。

また、多くの社会学者が全国から調査に入っていたので、その成果を一つにまとめておこうということで、協力して九九年二月に『阪神・淡路大震災の社会学第1巻 被災と救援の社会学』、『阪神・淡路大震災の社会学第2巻 避難生活の社会学』、『阪神・淡路大震災の社会学第3巻 復興・防災まちづくりの社会学』を刊行した。当初、私が被災地に入って感じたのは、社会学の無力性であった。震災復興の現場において具体的に何かをアドバイスできるといふことはほとんどなかった。しかし、この『震災の社会学』三巻本ができてみると、社会学者でないのとらえられない震災と被災地の実相が浮かび上がっていた。被災者やボランティアの目線で錯綜する事態が把握されているのだ。社会学ならではの視角からの考察であり、次の震災に対する教訓を導くために不可欠のものになると思う。

震災の全体を私自身が総括的に考察したのが「市民社会とリスク認識—阪神大震災の意味するもの」（二〇〇二年）である。ここでいくつか補足してみると、一つは、都市や地域がその「履歴」によって異なる対応を示すということ

である。人間でもそうであるが、都市でもそうなのである。「株式会社」といわれた神戸市では、住民は良く言って「顧客」、悪く言えば「統治対象」であり、一部を除いて地域の自治力はあまり育っていなかった。尼崎市は戦後に多数の区画整理事業を実施した経験から、都市計画決定の日程を繰り下げ、住宅施策と結合して住民の合意を形成していった。芦屋市西部地区は住民が、専門研究者の協力を得て、みずからまちのデザインを作っていた。市や地域の中にどれくらい「まちづくり」や「相互扶助」の経験が蓄積されているかが、災害対応において大きな違いとなって表れるのである。

二つは、大災害によって社会過程の進度が速められたということである。高齢者がインナーシティーの古い住宅に多く残っていて集中的に被害を受けたが、その後の「仮設住宅」「災害復興住宅」への「収容」的な施策によって将来の「高齢社会」が集約的にそこに表現された。また、「ボランティア元年」に端を発する市民活動の展開はめざましいものがあり、地域に根ざす相互支援型の新しい社会モデルを創造していった。被災地は市民活動の一つの先進地になっている。

三つは、神戸という大都市が引き続き「都市経営」上の問題を抱えていることである。ポートアイランド第二期と空港の工場用地が売れないことや空港の収益が想定以下であることから神戸市は深刻な財政的問題に直面している。港湾機能の低下を空港機能によって補完し、現代の大都市で初めて震災にあった経験を活かして医療産業都市としてグローバルシティをめざそうという戦略は理解できないではないが、ワールドシティとしての世界都市（マンフォード）をめざすことがもっと重要であろうと思う。広島市はグローバルシティではないが、世界に不戦と非核を訴えるワールドシティである。神戸市は大都市災害の経験と減災の都市づくりを世界に発信するワールドシティとして生きようとする決意が足りないように思う。

四つは、それにかかわって「災害文化」をどのように形成していくかである。災害文化の原点には「自然災害と共に生きる」という思想と方法があった。現代都市はハードの防災に重点をおくことによってそれを忘れてしまった。それをどのように復活させるのか、また「リスク」という形で自然・社会災害のポテンシャルティが高まっている。「リスクと共に生きる」ということと合わせて考えていかなければならないだろう。



## 五 定年を迎えて

震災の関係は一段落していったが、学部の大学院重点化改組の責任者、国立大学法人化の際の学部長（〇二年九月から二年間）という役職を担うことになった。大学も大きな社会の流れに抗すことができず「構造改革」の渦に巻き込まれ、さまざまな問題が噴出あるいは内攻している。しかし、大学と学問が社会への貢献をもっと強めるべきだということには抗いようがないことであり、それ自体は積極的なことである。ただ競争主義、成果主義でない方法論でそれを達成していくことが必要であろうと思う。

学部長とほぼ同じ時期に地域社会学会の会長を務めることになった。ちょうど学会創立三〇周年を迎えており、これまでの学会の成果をまとめようという気運のなか、古城利明氏、似田貝香門氏、矢澤澄子氏をはじめ多くの敬愛する会員と共同で、『地域社会学講座1 地域社会学の視座と方法』『地域社会学講座2 グローバリゼーション/ポストモダンと地域社会』『地域社会学講座3 地域政策とガバナンス』を刊行することができたのは喜びであった。

研究者生活を振り返って、至らぬ点、力及ばなかった点が多々あることに気づく。しかし、周囲の方々の助けを借りて何とか私なりの研究者生活を続けてこられたのではないかと思っている。定年後は、マルクス派でもありジンメル派でもある、という私の研究個性を生かして、そこから理論的あるいは実践的に何が生まれるのか、じっくり見定めたいと考えている。

さいごに、職場の皆さん、研究者仲間、勉学の場合を共にした学生・院生諸君、被災地で知り合った多くの方々に感謝しながら、この私記を閉じたいと思う。

（付記）

本稿は、二〇〇六年一〇月一四日、地域社会学会例会における「わたしにとっての地域社会学」という報告と内容が一部重なっていることをお断りします。